

---

# 天狗の鼻

三代渡吉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

天狗の鼻

### 【Zコード】

Z0510F

### 【作者名】

三代渡吉

### 【あらすじ】

会社をリストラされた青年が、ソーセージみたいなものを拾つた。それは、人を天才野心家にしてしまう天狗の鼻だった。

会社にいったら、荷物が全て片付けられていた。

新しく始まつたドラマの冒頭がそんな展開だったので、俺はそれを鼻で笑つてすぐにチャンネルを変えてしました。

この時間帯のドラマは、大抵演出が二流テレビコントみたいで、俺はあまり好きじやなかつたのだ。

そんな翌日、会社にいったら自分の荷物が全て片付けられていた。どういうことかと課長に問い合わせたら、「業績があまりにも悪いから、人事部が切り捨てたのだ」と説明して、すぐ書類に目を戻してしまつた。

頃垂れる俺を、同僚達は心配するどころか、冷ややかな目で人事のように眺めていた。いや、俺が仲間だと勘違いしていただけで、彼等は敵としてこんな視線を毎日俺に送つていたのかもしれない。ダンボールにまとめられた荷物をいくらか処分しつつ、必要なものは鞄がパンパンになるほど詰め込むと、俺は会社を出た。「ミを捨てても文句を言われなかつたのは、唯一の哀れみだと信じたい。これからどこに行けば良いのだろう?

もつとも、俺は一人暮らしだから、帰つても他人に対して別に後ろめたいことは何一つないのだが。

思えば、俺は昔から厄介者だつた。

学校行事では、率先して手伝おうとすると必ず追い立てられていた。陽気ではなかつた俺は、そのままクラスメイトの輪から締め出されていた。

イジメられていたわけでも、シカトされていたわけでもない。

ただ俺には親友と呼べる人間がいなかつた。個人として認識されることすらない、影の薄い役立たずな男が俺だつたのだ。

気づいたら、俺は樹海にやってきていた。

ということは死ににきたのだろうか？ わからなかつた。

いや、もしかしたら自分と同じ心持の人間を探しにきたのかもしない。テレビのニュースで目にするモザイク越しの人間達に、俺はいつも親近感を抱いていたから。

しかし、いくら歩いても彷徨つている奴は誰もいなかつた。

樹海に毎日自殺者が来るとは俺も思つていない。でも、今の落ち込んだ俺の心には、その状況が後ろ向きに映つた。

自分は、自殺者にすら近寄られない、相手にされない人間だと思えてならなかつた。

いくら俺が役立たずだつて、心中ぐらじ出来るつていうのに、チクショウ。俺は大地を蹴つた。

すると、不意に柔らかいものが畠を舞つた。俺は動物の糞でも蹴つてしまつたのではないかと、つい靴を確認する。

ひとまず欠片一つ糞がついていないことを喜んだ俺は、蹴り上げたものを確認した。

まるでソーセージのような、長細い肉の塊だつた。

しかし、肉にしては判子に使う朱色以上に赤い。血に染まつたとて、肉が全てこんな色には染まるわけはないだろ？

俺は、それが何かを確かめるために匂いを嗅ごうと、それを摘んで顔を近づけた。すると、鼻先にそれが磁石のようにくつ付いた。

驚いて剥がそうとする俺だつたが、それは全く離れない。初めから、それが俺の一部だつたかのように、皮膚と同化してしまつている。

近くの河で顔を眺めて見ると、鼻は本当に同化していた。くつ付いた部分たけやけに赤いことを除けば、ほぼそのままだ。

ただでさえ虐げられてこの仕打ち。俺は初めて神様を呪つて、死にたくなつた。

が、そんな沈んでいた心は、シャボン玉のようにあっけなく弾けて消えた。その後に湧いてきたのは、野心だつた。

「このまま、おちこぼれのままなんて『ermen』だ。俺はもつと、大き

な人間になるんだ」

俺は、持っていた鞄を投げ捨てて、樹海を後にした。

翌週、俺はシャレにならないほどの借金をして、小さな会社を建てて社員を集めた。

昨今の治安悪化に目をつけた俺が打ち立てたのは防犯グッズ産業で、低コストかつ使いやすい製品を社員とともに開発した結果、数ヶ月で会社は立派な企業として発展した。

俺は長鼻社長として雑誌やテレビで脚光を浴び始めた。

スキャンダルを探るうとした者もいたが、むしろずっと底辺を張つていたような俺の人生がピックアップされ、これがキッカケでエッセイの執筆も頼まれた。

樹海で拾った鼻のことだけは避けて、鼻が伸びた理由はまったくもって検討がつかないとシラを切りとおした。

虚言も含めたエッセイだったが、それは飛ぶように売れて、長者番付があつたらトップを争えるほどにまで、俺は成り上がった。

自分でも不思議だつた。どうしてこんなに飛躍できたのか。

それから十年経つた今や、俺はありとあらゆる分野の大手企業を下につけ、さらに儲けをあげていた。

もう俺に勝てる長者などいない。企業もない。人間もない。俺はなんでも出来る。もっとも神に近い男だ。

そして俺は、一つの野望を打ち立てた。

この国を……いや、世界をも下につけよつとつまり、世界征服である。

悪党が考える定番の野望であるが、俺はそんな非合法的な手段を大っぴらにやって世間から嫌われるようなことはしない。

ちゃんと頭で考えて、向こうが俺に喜んで服従するよつとしてやるのだ。

一番手っ取り早いのは、俺の偉大さを快い形で見せ付けてやればいい。

社会において問題視されている事柄には積極的に目を向けて支援し、社会的弱者を無償で救っていく。

それだけで、ほとんどの人間は俺に服従する。

美しさを好みない人間は、その小奇麗さを気に入らないと思っているのがほとんどだ。だから、俺は自分の身を滅ぼさない程度に失敗を犯す。

そして、それに対する俺は最善を尽くして持ち直させる。社会の批判は多少あつたが、評論家は人とちょっと違う意見を言おうとする生き物だ。

彼等は、俺の犯した失敗の問題点を指摘しつつ、その後の対応を実に素晴らしいと評価してくれた。

ここまでやつても懐柔されない捻くれものもいた。味方につけようと思えば出来ないことはないが、そこまで手を尽くすことは出来ない。

神に近くても、俺は所詮人間だ。一人や三人と分身することなど、到底敵わないのだから。

五年後、日本人のほとんどが俺のことを賛美していた。

いつの間にか政治家に飾り立てられていた俺は、故郷である埼玉県の知事になつて、常に支持率99パーセントを維持するまでになつていた。

町を歩けば、みんなが俺に寄つてくる。

仕事をしていくとも、バイキングを楽しんでいるときも、バーゲンに鼻息を荒くしていくも。

人々は、今までやつていたことを中断して、俺に寄つてくるのだ。もはやこの千葉県は俺の手足といつてもいいだろう。

ここを拠点に、まずは祖国日本のほとんどを、崇めさせていこうじゃないか。

そんな未来予想図を頭に展開させながら、俺はアメリカ大統領との会合へ向かうため、自室の席を立つた。アメリカ合衆国が、俺の

手足として動くようになる日も、そう遠くない。

ニヤニヤと笑いながら俺は扉に手をかけると、手に刃物が刺さつたような激痛がピリッと走った。

なんだろうと首を傾げてみると、今度は首を寝違えたような痛みがじわじわと湧いてきた。

突然のことに悪態をつきながら、俺は自分で痛いところをマッサージした。

その瞬間、物凄い頭痛と腹痛、そして筋肉痛が俺を一度に襲つた。

「うぎやああああああああ！」

こんな悲鳴をあげたことは、人生において一度もなく、最初は自分の悲鳴だとわからなかつた。それほど俺は、激痛に声が裏返つていた。

痛みは体全体に及び、電流でも流されてるのかと思つよつた、耐え難い苦痛が俺を容赦なく攻め立てた。

一体どうしてこんなことに。俺はこのまま死ぬのか？ 嫌だ！

自分はこの世界の頂点に立つんだ。世界の神になつてみせるんだ。

俺が呻いていると、窓からコンコンという音がした。

それなりに広い家だったが、家族はいない。使用人も雇つていない。鼻の秘密がバレたら困るからである。

だとしたら一体誰が？ そもそもここは二階だ。窓の掃除でもこない限り、そんなことはないはずなのだが。

苦しみながらも、俺は助けを求めて窓を開けた。

そこには、大きなモミジのような扇子を持った男がいた。

高い下駄を履き、羽を生やし、顔は真つ赤だがヒゲは白。

体系は人間なのに、全く人間らしさが……否、生き物らしさが感じられない奴だった。

俺はコイツを祭りで見たことがある。天狗だ。

唯一俺の記憶と違うのは、鼻がハサミで切られたように平べつたことくらいであった。

「鼻を渡せ」

天狗らしい奴は、しわがれた声でそう要求してきた。

俺は鼻を押されて顔を横に振つたが、相手は引き下がらない。

「そのままでお前の体は限界を超えて、木つ端微塵になつてしまつた。その激痛も、体が爆発しようとしているからだ」

普通ならにわかに信じられない話であった。

でも俺は、天狗の切られたような鼻を見て、信じて助けを求めずにはいられなくなつていた。

そのように要求を呑むと、天狗は俺についていた鼻をいとも簡単に取りあげると、自分の鼻にくつ付け、薬草を塗つた。

鼻は、みるみるうちに元の持ち主の下に戻つていつた。同時に、俺の激痛も徐々に治まつていつた。

「もつと早くお前に出会うべきだった。だがこれでわかつたであるう？　お前は天狗になれる器ではないと」

「そんな、今まで俺は名声と地位と金を積み上げてきた。これは俺の力だ」

「その通りだとも。だが、それは普通の人間が半分もその力を發揮していられないからだ。お前だけが人間が持つ最大の力を常に出し切つていたから、お前はここまで上り詰められた。だが、天才ならばもつと高みに行つていただろうよ」

天狗の鼻の事実を改めて俺は聞かされた。

彼の鼻は、その昔一人の武士に切り捨てられ、以降どこに行つたか検討がつかなくなつていたのだという。

時が経ち、仙術を身につけた天狗は、念力で自分の鼻を探し当った。

さらには長い年月によつて埋まつてしまつて、それを掘り出すところまで成功したのはいいが、そこに思わぬ邪魔である俺がやつてきたのだという。

「すぐに取り替えそうと思えば出来たのだが、自分の鼻が奪われたことで力を失い、私の意識は数年の間飛んでしまつていた。気づいた時には、お前は正に雲の上の存在になつていた。私はそう簡単に

人の世に姿を出せぬ身、穩便に話し合つためには、この時を待つしかなかつたといつわけだ」

「これから、俺はどうなるんでしょう」

「元のお前に戻るだけだ。元のよう、お前は人間特有の気楽を取り戻せるのだよ」

そう言い残すと、天狗は入ってきた窓から、さつさと飛び立つていつてしまった。そのまま俺は、意識を失った。

一ヶ月後。俺は公園のベンチにダンボールを張つて寝泊りしていた。

善政やありとあらゆる策を考える力を失つた俺は、たつたそれだけの時間で全てを失つた。

今や俺は没落のシンボル。新聞や雑誌は俺のことをそんな風に書いて嘲笑っていた。

でもどうしてだろう？ 昔よりずっと楽になつた気がする。

毎日のように頭を捻つていたのが嘘のよう、俺はただ生きるため、本能で動いていた。

生きるためなら「ミ箱だつて漁つたし、スリもした。

泥棒まがいのことだつてたくさんやつたが、みんなあの元大富豪がやつたとは、気づいてくれなかつた。

あれだけ顔の売れていた俺は、没落してから半年で、世間から忘れ去られたのだ。

無精ひげを生やして、やせ細つた俺の顔は恐ろしく醜くみえたが、人々はそんな不気味さに目を向けることもしなかつた。

また影の薄い存在に、俺は逆戻りしたのだ。

「今日の食事はソーセージか」

雪の降り注いだ寒い日、俺は食いちぎられたソーセージの破片を見つけた。雪で氷のように冷たくなつてゐるが、ないよりはマシだ。家の中で火を起こして食べれば問題ない。そう思つて、俺はソーセージを戦利品にいつものダンボールハウスへと帰宅した。

ソーセージを見ていると、あの天狗の鼻のことを思い出す。でも、またくつ付けようとは思えなかつた。

ソーセージは、土っぽい味がしたが、美味しかつた。

(後書き)

ソーセージを拾ったシーンのあと、同級生の女の子にあって、そのままグダグダヒールインというシーンをつけようと思つてたのですが、あまりにも強引過ぎたのでやめて、ここでケリをつけました。逆にオチが微妙になつたかもしれません。もし女性と上手くいついたら、ド田舎の駄菓子屋でのんびり暮らすというオチだったんですけど、これもまあ悪くない生活ではないかと。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0510f/>

---

天狗の鼻

2010年10月8日15時12分発行